

iii. 平島での取り組み

平島実習生 石須雄志 / 藤井健太



海上から見た平島の全景

はじめに

この度の企画を初めて聞いたとき、私たちはまず第一に「自分たち自身にとって未知の教育環境に、この機会にぜひ、直接ふれてみたい」と感じた。そしてトカラ列島及びへき地教育の情報を仲間と交換し、議論する過程で、自分たちが経験してきた類の教育が、実はとても限られた世界のものであることに気がついた。高いへき地性ゆえに地域社会と学校との結びつきが強いというトカラ列島の教育環境は、私たちにはとても魅力的であった。

実習生・藤井は、岡山県の山間部で育ち、市内の比較的大きな小学校及び中学校（1 学年 5 クラス）で過ごした。また実習生・石須は、東京のベッドタウンである埼玉県で育ち、密集した住宅街、中学校（1 学年 7 クラス）は大規模校という環境で過ごしてきた。そのような私たちにとって、へき地校における様々な教育活動は、漠然としたイメージではあったが、どれも非常に興味深いことに思えた。

研修に臨むにあたり、週に 1 回のペースで研究会を開き、各人の発表を基に以上のことを含めて様々な視点から、議論をしてきた。しかしそれは、主に現職教員の方々（大学院生）の経験談と文献に基づく、いわば「机上の学問」であった。「百聞は一見に如かず」というが、現地の教育環境に直にふれ、体験し、「生きた学問」として自分自身のものにしたいという気持ちが、実習本番が近づくにつれて徐々に強くなっていった。

この恵まれた機会を生かし、「へき地」という環境ではどのような教育活動が行われているのか、それを取りまく地域社会の実態はどのようなものなのか等について、実際に現地で、島の人々とのコミュニケーションを通して見つめてみたいと思い、本研修に臨んだ。

1. 平島について

(1) 平島の自然とくらし

周 囲：7.23km

面 積：2.08 km²

最高点：242.9m

人 口：78 人 (2006.7 末)

平島は、平家の落人（難を逃れて西走した平氏一団）がトカラ列島の中で最初に流れついたと言われる島であり、平有盛の子盛時の子孫、小松新少貳が、平島を拓いたと言われている。そのため、平島には平家や小松新少貳に関するものがいくつか伝えられている。島にある「島立神社」は、開拓祖である小松新少貳を祀る神社であり、

島だち（建国）から人は「島だち神社」と呼ぶ。また、「平家の穴」と呼ばれる海岸沿いの穴は、かつて平家の落人が、源氏の追手を監視するため作った穴だと言われている。さらに、赤牛山の平家堀、のろし台など、各所に追手を監視する望楼の名残と言われる史跡が残されている。

平島では、昔ながらの習俗がトカラの中で最も守り続けられている。主だったものとして中世の頃から続く元服の儀式が、今も当時の形式をほとんど変えずに行われている。例えば、「十五の祝」や「オーニワ踊り」などがあるが、習俗に関する風景や写真については村上修一著『絶海の孤島～トカラ列島・平島～』（新風社、2005 年）を参照されたい。また、島に伝わる島歌は今でも伝えられており、敬老会などの行事で歌われていた。

名所としては、まず集落に存在する「ガジュマルトンネル」を挙げることができる。平島のガジュマルは樹齢が 1000 年を超えられていると言われており、お盆にこの木の下で古式豊かな盆踊りの奉納をする。また、「穴口」といわれる自然の作った不思議な穴がある。この大きな潮溜まりである「穴口」は、岩のくぼみに入っていた小石が、満潮時に流れの速い潮に洗われてくぼみの岩を徐々に砕き、年月をかけてくぼみを広げ、大きな岩のカドを少しずつ丸くしていったものと考えられている。さらに、大浦展望台放牧場の柵を越えた「展望台」は、晴れた日にはトカラ列島の全島を見渡することができる絶景ポイントである。

昼間は集落付近から見える海と空が調和し青く澄んでおり、夕方になると「夕焼けこやけ」のきれいな音楽な流れ、幻想的な赤い雰囲気を作り出す。そんなステキな島である。



図 1. 平島の地図

出典：十島村役場ウェブページ

<http://www1.tokara.jp/contents/profile/taira.html>

（２）平島小中学校の教育体制

平島小中学校の児童生徒在籍数は10名であり、そのうち小学生6名、中学生4名である。小学三年生1名と小学四年生2名、小学五年生1名と小学六年生2名は複式学級である。また、中学一年生1名と中学二年生1名は同一学級であるが、学級活動や道徳を除いて、授業は全く別で行われている。中学三年生2名のみ単式学級である。また、全10名中、山海留学生は4名、教員子弟は3名、島人の子どもは3名である。

教職員及び島民は、現下の学校教育の充実と共に、将来の学校存続について常に強い関心を寄せている。在籍児童生徒数の確保は、学校運営上、非常に重要な意味を持っている。

教職員は全9名。校長先生、教頭先生、以下、40代2名、30代2名、20代3名（講師2名を含む）である。現地校の教職員の話によれば、教員一人あたりが担当する校務分掌の種類は多く、大規模校に比べて量的にも多いのではないかと感じた。しかしこのことは、全教職員が協力して児童・生徒を育てていくという学校としての姿勢、と私たちは受け留めた。また教員は、上から指示をするばかりではなく、児童・生徒たちに自ら考えて行動させるように導いていた。このことも、とても印象的であった。

校舎は平屋建てであるが、これは家屋と同様に強風対策のためと思われる。また別棟に給食室、「平島小中学校へき地集会室」と銘うった体育館がある。学校の敷地内には、教員住宅の一棟（現在は教頭先生宅）があり、その他の教員住宅は、集落内に点在した形で建てられている。教員はみな、その教員住宅に住んでいる。

校内の購買部へ、島民が買い物に訪れたり、島民間の会話で運動会のことが話題にあがっていたりしていたことから、地域住民の目は、日常的に学校に向けられていた。まさに地域のセンター的機能を果たす、「地域に開かれた」学校であると感じた。



平島小中学校の全景



音楽室

2. オリジナル授業

(1) 学習指導案

第 5 ・ 6 学 年 社 会 科 学 習 指 導 案

指 導 者： 石 須 雄 志 ・ 藤 井 健 太

学年・学級： 第 5 ・ 6 学 年 の 複 式 学 級

場 所： 平 島 小 学 校 第 5 ・ 6 学 年 教 室

日 時： 平 成 18 年 9 月 13 日 (水) 第 4 校 時

1. 題材名 「お国自慢大会をしよう!!」

2. 単元設定の理由

(1) 教材観

平島の子どもたちに、行ったことのない世界を見たり、会ったことのない人とふれあったりする経験を数多くしてほしいという思いから、この主題を設定した。島という閉鎖的な空間において、固定化された環境、固定化された人間関係の中で生活している子どもたちにとって、このような経験は視野を広めることになり、貴重なものとなるに違いない。また、自分たちのふるさとである平島に、今以上の愛情を持ってもらいたいという思いもある。高校生になると、島の子どもたちは本土で生活することになる。島の生活で培った純粋な心や島人の愛情をいつまでも忘れず、郷土に対する愛情を持ち続けてほしいと考えた。

また、私たちが実際に子どもたちとふれあうことにより、そして本授業によって、少しでも上記のような心を育てたいと考えている。

(2) 児童観

授業日まで子どもたちと生活する中で、子どもたちの実態に合わせ、授業の若干の変更を行う。

(3) 指導観

以上の理由から、「お国自慢大会をしよう!!」という授業を展開する。授業前に既に「わたしたちの町、社（やしろ）」を自己紹介とあわせて行っているので、子どもたちには事前に平島の自慢を同じようにしてもらう旨を伝え、授業日までに準備を行ってもらう。

授業においては、「わたしたちの町、社」と同様に、わたしたちの故郷である岡山と埼玉についてそれぞれが発表し、それを子どもたちが聞くことにより少しでも視野を広めることを期す。その後、子どもたちが事前に準備した郷土・平島を発表することにより、島の良さを再確認させると同時に、人前で分かりやすく発表するというプレゼンテーション能力を育てることができると思われる。

なお、ただ単に「知る」、「郷土愛を持つ」ということにとどまらず、「考える」という思考も取り入れる。単純に自慢し合うのではなく、話し合いの中で「どうしてこのような違いがあるのだろうか」と考えるようにするのである。そのため、調べる内容について項目を設定し、比較しやすいようにする。

3. 目標

- ・自分たちがこれまでに知らなかった土地について興味関心を持つと同時に、平島の良さを再確認し、郷土に対する愛情を育むことができる。[興味・関心]
- ・地理的・文化的な違いから、多くの面で異なる点があることを考察することができる。
[思考・判断]
- ・分かりやすく相手に伝えるよう工夫することができる。[技能・表現]

4. 授業の流れ

(1) 事前準備

予め、授業担当者は埼玉県、岡山県の特徴について、パワーポイントを用いてプロジェクター画面に映し出す資料を作成した。また、現地校の小学五・六年学級の担任教諭と、事前に何度か電話で打ち合わせを行うと同時に、以下に示すワークシートを学級に送り、それをもとに、子どもたちに平島について模造紙にまとめてもらった。

なお、下記のワークシートは、表現など、一部変えている。

「お国自慢をしよう!!」

年 名前 ()

平島小中学校5、6年生のみなさん、こんにちは。兵庫教育大学大学院の石須雄志(いしずゆうし)、藤井健太(ふじいけんた)です。9月9日から1週間、みなさんの住んでいる平島にお世話になります。みなさんの住んでいる島のことについて多くのことを知りたいと思っています。そこでみなさんに平島の以下の事柄について調べてもらおうと思います。13日の4時間目にみなさんに発表してもらいます。よろしくお願いします。

①次のことを調べてみよう!!

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1, 名所(ここにしかない自慢の場所) | 2, 自慢の食事(郷土料理, 家庭料理) |
| 3, 自慢の祭り・行事 | 4, 言葉(方言) |
| 5, 家(身の回りの風景) | 6, 自分と関係のある人たち |
| 7, どうしても自慢したいこと(なんでもOK) | |

②調べたことをまとめてみよう!!

ポイント!!

- (1)まとめる方法は自由(模造紙, 画用紙など)
- (2)見る人にわかりやすく(写真や絵を入れてみるなど)

(2) 本時の流れ

	児童の活動	教師の働きかけ	予想される児童の行動
導入	<ul style="list-style-type: none"> 岡山県，埼玉県のプレゼンを聴く． 	<ul style="list-style-type: none"> 岡山県，埼玉県のお国自慢をそれぞれ行う． 岡山県：藤井健太 埼玉県：石須雄志 写真や資料を見せて，興味を持たせる． 	<ul style="list-style-type: none"> 未踏の県の見たことの無いものに驚きや関心を示す． 「大きいな！」
平島の自慢をして，岡山・埼玉との違いを考えよう!!			
展開	<ul style="list-style-type: none"> 平島の自慢をする． 各項目について違いを考える． <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> 項目 ・名所・住・食 ・行事・人 </div> <ul style="list-style-type: none"> 地理的な特性が関係していることに気付く． 	<ul style="list-style-type: none"> 児童が調べた平島の紹介・自慢を発表させる． 子どもたちの主体性を尊重する． 岡山，埼玉，平島で違いがあるのはなぜかを考えさせる． 地理的な特性や文化などの影響があるからだ気付かせる． 「なぜ，このような違いがあるのかな？」 	<ul style="list-style-type: none"> 写真や資料（イラスト）などをもとに自分たちが調べたことについて説明を行う． 「山が多い．」 「川がある．」 「人口が多い．」 「海に囲まれている．」等々．
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> 本授業の感想を述べる． 自分たちが生まれ育った土地を大切にすることを改めて感じる． 	<ul style="list-style-type: none"> 発表をしてみて感じたこと・思ったことを各自発表させる． もっと郷土を愛して，自信をもって自慢して欲しいと伝える．（自分の経験から，またはこれからみんなが本土に行く時のことも含めて） 	「緊張した．」 「うまく言えなかったけど，頑張った．」 「もっと～したかった．」 「ここがうまくできた！」



平島について発表する児童



オリジナル授業後

（２）実践報告

本授業の目標としていた、郷里（居住地）と他地域との比較については、遠方からやってきた珍しい教育実習生に対する印象も手伝って、子どもたちにとって郷土意識を確認する機会にはなり得たと思われる。このことは、授業後の子どもたちの感想からも、窺うことができた。しかし実際に授業を進めながら、反省すべき点がいくつか明らかになった。

まず、私たちの事前の予想に反して、子どもたちの表現能力が高いことである。少人数編成であるが故に、普段から固定された人間関係の中で学校生活を送っているので、知らない人の前で発表する力は弱いのではないかと単純に考えていたが、この先入観は授業開始後まもなく、取り下げなくてはならなくなった。3人とも物怖じせず、分かりやすく発表しており、私たち自身、島の情報について彼らの報告から教えられる部分もあった。

なぜ彼らは表現能力に優れているのか。それは、少人数であるが故に自分の意見を表明しなければ授業が展開しないことを、彼らは子どもながらに理解しており、教える側も意図的にそのような授業を組み立てているからであろう。子どもたちはその中で、表現能力を向上させていったと思われる。授業外においても、子どもたちはふだんから生徒会活動や子ども会活動等のあらゆる機会において、多くの役割がまわってくる。そのため人前に出る機会に恵まれ、「自分がしっかりしなくては、この社会はまわらない」という責任感が生まれるのではないだろうか。

また、指導案に「島＝閉鎖的な空間」と安易に書いたことは、反省している。このことは、本授業後に担任教諭から指摘を受けた。確かに空間的には閉鎖されているかもしれないが、実際に島で生活する中で、島民は不自由さをあまり感じていないようにも受け留められた。子どもたちも意外と、閉塞感を感じていないのかもしれない。

以上のことを踏まえると、この授業で子どもたちに何を伝えることができたのか、私たち自身、正直、心許ない部分がある。指導案に書いた前提条件が実態を必ずしも反映していないことを私たちは本授業後に理解したが、せっかく頂いた有り難い機会をより有効に活用するためには、事前の実態把握をもっと入念にするべきであった。

率直な感想としては、子どもたちはそれぞれ自分の視点で島の良さを調べていて、それを表明する際の雰囲気から、彼等自身の「この島が好き」という気持ちがよく伝わってきたことである。ある子どもは「こういった授業は初めてで、おもしろかった。」と感想を述べてくれた。私たち自身、島の子どもたちに自らの島のことを語ってもらうことに対して、とても感激した。

郷土意識の醸成、授業前の実態把握の必要性などについて、私たちは本授業を通して多くのことを学んだ。教壇に立つことを目指している私たち実習生にとって、これらはかけがえのない経験であった。

3. 研修全体を通して

(1) 研修内容

オリジナル授業「お国自慢大会をしよう!!」以外にも、学校の内外において、多くの研修機会に恵まれた。

〔平島小中学校における実習〕

小中学校における研修では、基本的に正規の教育実習と同等の内容をこなした。私たちの指導教官である赤瀬川先生の計画のもと、他教員の授業参観や講話、授業への参加や実践など、多様な研修機会に恵まれた。授業外である休み時間や放課後には、子どもたちの作業を手伝い、学校行事の準備、島太鼓の練習などにも参加した。

実習生・石須は、主に小三・四年学級を中心に研修した。小学校算数科において、複式学級での授業実践を初めて経験した。小学校三年生では「水のかさ」、小学校四年生では「三角形」を行った。

実習生・藤井は、主に中三年学級を中心に研修した。生徒は男子二名で、授業参観のほか、最高学年として学校を引っ張っていく彼らの姿を観察した。

〔授業外の研修〕

地域との密着度がとても強い学校であるため、学校のみの実習に終始することを出来るだけ避け、より広い視点で、平島の学校教育を考察しようと努めた。地域散策を意欲的に行い、島民の日常の活動や、地域社会と学校との関わりについて観察した。島民及び実習校の教職員のご厚意で、定期船の通船作業や懇親会、漁、敬老会などへの参加を許され、島の風土や風俗についてもより深く考える機会に恵まれた。中でも敬老会において、子どもたちや教職員と一緒に島太鼓の演奏に参加したことは、個人的にとっても楽しい思い出である。島に上陸したその日から、子どもを含めた島内の様々な立場の人びとから懇意にさせて頂いたことが、何よりも嬉しかった。



全児童生徒、教職員との給食



敬老会における太鼓演奏

（２）研修を終えて

滞在期間中、自然の豊かさや偉大さに改めて感じ入り、島の人びとの温かい心に癒された。どこか「おばあちゃん家」のような安心感があった。この島で育つ子どもたちが、羨ましくさえ感じた。私にとってこの度の実地研修の目的は、平島で行われている教育を実際にこの目で見て、経験することにあった。それに加えて、離島という環境の特性や島の人びととの交流を通して、子どもを取り巻く教育環境を含めて、平島全体を理解したいという大きな目標もあった。

当初は、この島で行われている教育実践を他の場所でも一般化できるのではないかとという想いがあったが、実習が進むにつれて、一般化が難しい地域固有の特性があることを意識するようになった。それは、地域の特色やコミュニティの良さを最大限に生かして、子どもたちを育てていくことに、この島が特に優れていることに気付いたからである。しかし一方で、同世代とのコミュニケーションの機会や大集団の中での人間関係形成などの点では不利な面があった。わかりやすい例を挙げれば、島の子どもたちだけで野球やサッカーなどの集団競技を行うことは必然的に難しい。つまり興味を抱いても、子どもたちの想いを叶えることは困難であった。

この度の実習を経て、学校教育は、その地域とそこに暮らす人びと、そして子どもたちの（マイナス面よりも）プラス面を最大限に生かして、その前提を以て「何ができるか」「何が必要か」を考えて前に進めていくべきものだ、ということ強く感じた。この島の温かな教育環境は、私をそのような気持ちにさせてくれた。

平島には、地域と学校が一体となった「共生」の言葉に代表される素晴らしい教育環境があり、今日の日本の多くのコミュニティが見習うべき点が多くあった。私自身も、今後携わることになる何処かの教育現場に、このことを何らかの形で伝えたい気持ちである。教員養成系の大学に学ぶ者として、これまで教員養成を目的とした様々な授業や研修を受けてきたが、この度のような研修機会には、もう二度と出会えないであろう。

島の雄大な時間の流れの中にあっては、わたしたちが滞在した期間はほんの一瞬のことであったのかもしれない。そのほんの少しの間、島のコミュニティに参加させて頂いた経験を、今後の自分自身の教育実践に必ず、活かしていきたい。

藤井健太



自己紹介の様子



漁で獲れた魚

平島におけるあらゆる事象は、島の人びとがよく口にする「共生」というキーワードに集約されていた。歴史、文化、行事、建築、自然環境、人（島の方々、子どもたち、先生方など）、学校、生活様式等、全てが「共生」につながっていたように思う。実際に島内で体験したあらゆる場面において、「共生」の精神が色濃く映し出されていた。

私はこの「共生」こそ、（ある先生が指摘していた言葉であるが）「古きよき、昔の日本の姿」そのものではなかったかと思う。願わくは、社会の大きな波に吞まれず、かといって決して取り残されるのではなく、この精神を大切に、今の地域観、学校観、社会観を島人みんなで守ってほしい。短い滞在期間ではあったが、今も平島のことを思い起こすとき、そんな思いに駆られる。このことは離島という地理的要因だけで成し得るものでは決してなく、人びとの気持ちがいつも同じ方向を向いていないと難しいであろう。しかし平島には、これを成してきた実績がある。この隠れた「地域の力」を、今後も守ってほしいと心から願っている。

平島の学校教育に関して、「ここでしかできない教育とは、何なのか？」という問いに対し、恥ずかしながら現時点で「これだ」という明確な答えは導き出せていない。しかし、短い滞在期間中に導き出した私なりの仮説は、子どもを取り巻く教育環境が、「共生」に向けた教育を直接的、間接的に行っていることではないかと思う。それは学校現場においてはもちろんのこと、地域社会の中にあっても同じように、はっきりと貫かれていた。

研修の中で、個人的に特に関心を持ったのは、異年齢集団により構成される子どもたちの共同体のあり様である。運動会の練習、太鼓練習、学校だよりの配布、そして子どもたち同士で温泉に行くことなど、異年齢集団で活動する場面に多く遭遇した。その中で、この共同体の長の自主性と、リーダーシップに感銘を受けた。下級生の子どもたちをぐいぐいと引っ張り、時に注意する姿は、長と呼ぶにふさわしいものであった。特に太鼓練習のときは、教職員も参加している中、まとめ役として、うまく叩けない子のフォローを入れたり、大きな声で練習内容を確認したりしていた。その反面、下級生の子どもたちは受け身がちな印象があったが、しかしこの子どもたちも、やがてはこの異年齢集団の長となると、自主性、リーダーシップをとるようになるという。自然のサイクルと同様な、「人間のサイクル」のようなものが、この島には強く残っていると思った。そして同時に、教職員がこの子どもたちの共同体を見守り、その一員として参加しようとしている姿にも接した。運動会の練習のような場合を別として、この子どもたちの共同体に対して、上から干渉するようなことはせず、温かい目で見守っていた姿が印象的であった。

改めて研修全体をふり返ると、研修内容は事前に想像していた以上に多岐にわたり、量的にも多かった。そして島のあらゆる立場の人たちとのコミュニケーションこそ、私にとって大きな研修成果であったような気がする。それに加えて、そっと手を差し伸べる心、一緒に何かをしようとする態度、花を愛する心、素直な心など、普段は気にしないようなことを、子どもたちとのふれあいの中から見つめなおすことができた。

島を離れる最後の瞬間まで、心のこもった対応をして頂いたことを、私は絶対に忘れない。島で過ごした時間は、本当に楽しかった。

石須雄志

おわりに

自分たちが知らない社会や教育活動の実相を，自らの「目」で見て体験したいという好奇心から出発した，トカラ研究会への参加，そして平島での研修であった．実践の中で学ぶことの重要性，実際に自分で見て考えることの大切さを痛切に感じた研修であった．校長先生から，自分で「みる」，「知る」，そして「感じる」という行為の大切さを教えて頂いたが，このプロセスをこれからも日々大切にし，他人から一方的に提供された陳腐な解ではなく，私たち自身で考えて導き出した解を，追い求めていきたいと思う．

最後に，見ず知らずの私たちを温かく受け入れて下さった畦地校長先生，川口教頭先生をはじめとする教職員の方々，特に指導教官として温かく接して下さった赤瀬川先生，今村先生，そして，児童生徒の皆さん，平和荘のご夫婦はじめ平島の方々に，この場を借りて厚くお礼申し上げます．



平島への再島を夢に見ながら